九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「子どもの生活体験をデザインする」 南里悦史/上野景三/井上豊久/緒方泉 編著

菊川, 律子
独立行政法人国立青少年教育振興機構

https://doi.org/10.15017/26718

出版情報：生活体験学習研究. 11, pp.63-64, 2011-01-20. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第11号　63－64（2011）

「子どもの生活体験をデザインする」

南里悦史／上野景三／井上豊久／緒方泉 編著

本書は新書版200頁余と大部な著書ではないが、子どもの生活体験を理論と実践から多角的に捉えた著書である。日本生活体験学会の創設から10年を経過し、学会として生活体験学習の研究・実践等を続けてきた実績を踏まえ出版されたものである。

編集の意図は「はじめに」の「かっての子どもの日常生活は、発達環境の場として豊かに存在していました。遊びや仕事、労働技術や伝統文化、異世代関係や習俗慣習から自然・生活環境など、新しい発見や認識、冒険のある生活経験として広く獲得されていました。」「本書では＜リアリティのある多様な生活体験が、多様な生活を作る起点となる＞ということを基本において、子どもの生活能力再生のために、子どもや大人の危機に立つ生活・学習の実態を踏まえて、わかりやすく、生活体験学習の方策を考慮した構図をデザインすることにしました。」に現れている。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに　(南里悦史)
第１章　子どもの発達環境の変容と生活体験学習　(南里悦史　山崎清男)
第２章　遊びと生活体験　(井上豊久)
第３章　家庭と生活体験　(大村綾　東内瑠里子　上野景三　相戸晴子)
第４章　地域・環境と生活体験　(上野景三　永田誠　正平辰男)
第５章　学校と生活体験　(桑原広治)
第６章　メディアと生活体験　(井上豊久)
第７章　文化芸術と生活体験　(緒方泉　吉田公子　丸尾いと)
第８章　身体・動作と生活体験　(小原達朗)

第１章が基本編で、第２章以下が実践編である。実践編は第２章の遊びを切り口に、第３章から５章までが家庭、地域、学校という子どもたちの生活の場ごとに実態や課題が整理され、更に第６章から８章は、メディア、文化芸術、身体・動作と課題ごとに問題提起がなされている。

第１章は、子どもの生活の歴史を辿り、その変容や生活体験学習のもととなる「形成」の重要性を指摘している。また、学力調査や年間授業時数の推移を紹介しながら「生活体験学習によって獲得される多様な認識が、多様な筋道を自らの手で創りださなければ、知識の発達や知識を生かし応用する社会化とはならない。」と述べている。具体の事例として「学校支援と地域の役割」では大分県の学校地域支援本部の実践や調査等を紹介している。

第２章は、遊びは、いのち・体をつくり幸せな人生の基礎基本と述べている。戦後の遊びを分析し、室内遊び、個人遊び、同年齢遊びといった現代の遊びの特徴を指摘している。このような遊びを本来あるべき遊びへと戻すために、指導者や指導実践、遊び空間の再生について指摘している。

第３章は、４人の著者がそれぞれの専門性を生かし、親子関係、初めての子育て、食事、基本的生活習慣、お手伝い、子ども部屋と情報ツール、お小遣い、いのちの体験、子育てサークルなど家庭に関する多様な場面において現状と処方箋を示している。子育て文化の変容に触れつつ、毎日の地道な生活の積み重ねが子どもの健全な成長にいかに大切か理解でき、親等のより良い実践に繋がる内容である。

第４章は、「三間」といわれる子どもの時間、空

間、仲間の喪失や大人と子どもとのふれあいの減少など、子どもをめぐる地域・環境の変化に触れながら生活体験学校を中心とする実践を紹介している。通学合宿型の生活体験学習の教育的効果として子どもの生きる力の育成と地域の教育力の再生を挙げ、さらに前者として課題解決能力、身辺的自立、社会的自立、心身の健康をあげている。また、その代表的施設である庄内町生活体験学校での動物とのふれあい体験やドングリの育苗体験などの連続する体験プログラムを紹介するとともに、体験学校の活動に参加する小・中学生の体験と学力との関連調査から明らかになったことを紹介し、体験が学力を育んでいると指摘している。

第５章は、学校と生活体験の関連を学力と基本的生活習慣、時間割と忘れ物、給食と食育、読書と学校図書館、宿題等、学校の現場ならではの提案が示されている。子ども自身が作る生活習慣の自己評価表、親との関係づくりなど具体的な示唆に富んでいる。

第６章は、電子メディアが子どもに与える影響について年代別に辿り、ゲーム漬けの危険性とあわせ発達上の課題を指摘している。子どもの携帯電話の問題点と保持の際の留意点、メディアと脳に関する最新情報等を示し、メディアとの上手な付き合い方を提案している。

第７条は、「いまこそ、表現活動をこどもたちに」と暮らしの中の子どもたちの文化芸術を取り上げている。「させる」ではなく「する」ことを大切に、素材や技法の習得、土台となる五感を刺激する直接体験、唱歌や童謡の力等に触れ、博物館でのコミュニケーションを育てる実践や大学生による「ひらめきアート」活動を紹介している。

最終章である第８章は、身体的文化としての生活慣行、すなわち生活の作法や技法について取り上げている。最近の子どもたちの生活技能の調査を過去の調査と比較しながら、生活体験の場に生活の作法や技法が学べる内容があり、それらを見守る仕組みが必要であると指摘している。また、道具と付きあうことの大切さや子どもたちは生活体験の中にある動作性によって身体技法を身につけることができると指摘している。

以上簡単に概要を紹介させていただいた。

私の所属する独立行政法人国立青少年教育振興機構では、昨年度「子どもの頃の体験と体験を通して得られる資質・能力（調査では「体験の力」と呼んだ。）」の関係を成人及び青少年調査で量的に把握する「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」を実施したが、最近結果が公表され、新聞や週刊誌にも取り上げられ話題となった。体験が多いほど社会性や自尊感情、規範意識等が身についているという当たり前の調査結果であるが、数値で示されているのが面白い。

子どもは紙や鉛筆のみで育つのではなく、家庭、学校、地域の遊び、日常生活、自然との出会い、社会との関わり等様々な体験等の中で、まさに「形成」されていくことを、親や教師、一般の人の常識にすることが求められている。

本書はそのような理解を深め、親や関係者の実践の手がかりとなる好著である。

[光生館、2010年、1,200円]

(独立行政法人国立青少年教育振興機構　菊川律子)